

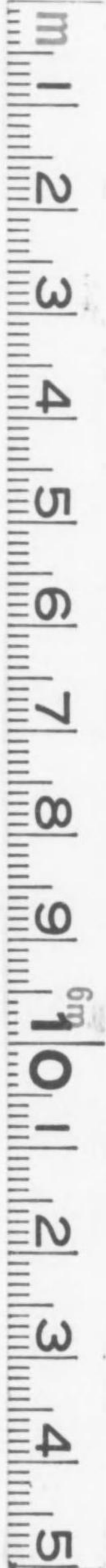
特 257

704

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十六)



始



特257
704



臨濟宗
長寺派
管長
菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其十六)



碧巖錄提講

行、到、水、窮、處、坐、看、雲、起、時。

長沙禪師の、始めは芳草に随つて去り又落花を逐うて回かへる、それと蓋し同工異曲と云ふべし。

梅、瘦、占、春、少、庭、寬、得、月、多。

是は或方面から觀見したる長沙禪師、瘦せたるが故に春を占むること少し、寬きが故に月を得ること多し。

富、嫌、千、口、少、貧、厭、一、身、多。

普通一般人情の上から、長沙禪師の始めは芳草云々の意を忖度

すれば、恁麼の嫌厭なき能はず、あるが自然。——

臂、長衫袖短、脚瘦草鞋寛。
是亦、長沙禪師芳草云々の直譯である。諸君、お互に恁麼の經驗ありしならん。衲なまは人一倍經驗しました。

坐、石雲生衲、添泉月入瓶。

之是は衲が平生底。長沙禪師も亦復然り。名は變り處は異なる
と雖も、諸君も亦復同道唱和。

水、帶、荷花白、煙、和、揚、柳、青。

豈人間長沙禪師のみならんや。水と雖も煙と雖も、始めは芳草に隨ひ又落花を逐うて回る、に至るは同じ。

火、不待日熱、風、不待月涼。

火は如何に、風は如何に。火は自然に熱し、風は天然に涼し。
そのまゝそれが長沙禪師。衲なまも亦復然り。

閉門、推出月、穿井、鑿開天。

されど時と場合に依り臨機應變、隨機說法。門を閉づるも好し、井を穿つも悪しからず。要は下化衆生。」

第三十六則 長沙芳草落花

四

◎本則

舉、長沙一日遊山、歸至門首、首座問、和尚什麼處去來、沙曰、遊山來、首座云、到什麼處來、沙曰、始隨芳草去、又逐落花回、座云、大似春意、沙曰、也勝秋露滴芙蕖、雪竇著語云、謝答話、

讀方

舉す。長沙一日遊山し、歸つて門首に至る。首座問ふ、「和尚什麼の處にか去來せしや。」沙曰く、「遊山し來る。」首座云く、

「什麼の處にか到り來るや。」沙曰く、「始は芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回れり。」座云く、「大に春意に似たり。」沙曰く、「也秋露の芙蕖に滴るに勝れり。」雪竇著語して曰く、「答話を謝す。」

此の則には垂示はありません。長沙と首座と雪竇禪師、三人が大法を横拈倒用なされた一幕と見るべし。本則の主人公、長沙は地名、湖南省の長沙鹿苑寺に居られた景岑禪師のこと。此の人の法系は南泉普願禪師、趙州從諗禪師、陸亘大夫、子湖利蹤等と法の上の兄弟であると云ふ。生年月日も世壽も示寂の年月日も一切不明であります。此の人は文才拔群、故に傳燈錄に

五

偈頌が澤山載せてあります。其の中で最も衲ヌエが意に適するものは、盡十方世界是沙門眼、盡十方世界是沙門全身、盡十方世界是自己光明、盡十方世界有自己光明裏、云々是なり。井上君は、長沙禪師は思想高遠、例せば日本の西行法師に彷彿たる人物、寺とか宮とか云ふ宇宙の一小局部に構へて居ることが大嫌ひ、「願はくは花のもとにて春死なん、その更衣の望月のころ。」と云ふ静寂裏に艶麗を含みしものでないにしても、「南朝四百八十寺、多少樓台煙雨中。」と云ふ景色を眼下に見おろし、白雲深き幽邃の境に於て泊然たる永眠をなされたでありませう、と云はるゝ處を見れば、井上君は彼の土の長沙、此の土の西行に共鳴

して居らるゝものと思ふ。衲も、井上君の敢へて後塵を拂ふにあらざれども、長沙と西行に多少共鳴の一人。故に常に長沙の盡十方世界云々を愛讀翫味してをると共に寂室じやくしつ禪師の老來殊覺山中好、死有岩根骨也清、と云ふ高風を慕うて居ります。

井上君重ねて曰く、「要するに長沙は詩人であり隱遁者であり哲學者であり禪僧である。色々の點に於て西行法師に似て居るが、唯一の異なる點は、西行は情熱の美に充たされて居る、長沙にはこれが缺如して居る。此の點から云へば西行は宗教家であり、長沙は哲學者に近い。従つて彼の詩は哲學理論で、西行の詩の如き人情美がない。」——更に曰く、「之は長沙に限らず

總ての禪僧に通ずる事實である。」と人情美の薄きことを嘆息して居らるゝ。如何にも然りであります。苟も宗教家である限り禪僧たるものも名聞名利に走るは元よりよろしからず。されど人情美は寧ろ濃厚ならざるべからず。何が故ぞ。衆生無邊誓願度、それが目的であり標準である。——長沙一日遊山、歸至門首。』或日長沙禪師遊山して門口まで來られた。諸君既に知らるゝ如く、禪僧の遊山は普通一般の人の遊山玩水と外面は或は同じと雖も其の内面は大いに異なり。——修行成就、大悟徹底、した所謂閑道人、其の人が縁に觸れ感に應じ悠々自適。それでなければ、歩々是道場、歩々起清風、と云ふ底の遊山に

はなりません。然らざる遊山は禪僧の遊山に非ずと知るべし。

——茲の處へ圓悟禪師が例の横鎗を入れて曰く、「一日とは何だ。いつも今日だ。一年三百六十五日、いや百年三萬六千日、それがそのまゝ今日だ。然るに一日と云ふ日が別にあるか。只管落草、第二義門に落ちたぞ。——一度落草すれば永劫浮ぶ瀨はない。」と。——此の首座は長沙門下の一禪僧、仁に當つて師に譲らず、事に臨んで寧ろ猶豫すべきや。何れの處をお遊び歩きになりました。平生底の挨拶であるが、言中に響きあり。之は是れ長沙禪師の脚下點檢の一句。——沙曰、「遊山來。」さすが長沙、無邪氣に答へられた。——飯田師婆語して曰く、

「此の無邪氣な答で、敵数の多少を探るが如く、相手の境界、その生か熟かを見て火蓋を切るのだ。」と。或は然らん。されど己を以て人を忖度することはよろしくない。——圓悟禪師は不可落草と一語を下した。餘り落草なされると敗缺を取りますぞ。拙僧ならば首座に一驚を喫せしむる手段あり、と云はぬばかり。』衲は云ふ、人のお世話をなさるより人のお世話にならぬ様になされ、と。——「到、什麼處來。」首座追窮して曰く、「只遊山と云ふのみでは分りません。遊山は嵐山か吉野か、山上か山下か、或は山南か山北か。」——若し目的を豫定しての遊山であるなれば未だ凡情を脱せず俗意漫々たる遊山、それを點檢せ

んが爲に斥候を放つたのである。——長沙禪師は老將軍、その手は食はぬ。苟も敵に探見さるゝ様な配置はしてをらぬ。煙幕を用ひずと雖も見る能はず知る能はず。何が故ぞ。他なし没蹤跡。——所謂、百花叢裏を過ぎて、一葉身を濕さず。——紅塵裡を過ぎて紅塵を脱し蓮華の泥に處して清淨の花を開くが如し。——沙曰、「始隨芳草去、又逐落花回。」往く時は何となく春の野に萌え出る千草の美しさに見惚れ、知らず識らず山中を歩き、頂上であつたか谷間であつたか一向に覺えがない。又歸る時も別に歸らうと思つたのではない。風、柳絮を吹けば毛球走り、雨、梨花を打てば蝴蝶飛ぶ。——それを逐

ひ逐ひ到頭こゝまで回つて來た。——水鳥の行くも歸るも跡たえて、されども道は忘れざりけり。——花が自己か自己が花か、——蝴蝶が自己か、自己が蝴蝶か。——秋であれば、落霞と孤鶩と齊しく、飛び秋水長天と共に一色、と云ふ處。——首座が如何に突き込まうとしても聊かの隙も見出すことが出来ぬ。されど敵と對陣したからには、一彈丸を放たずして退くは禪者の面目にかゝる、云はゞ永世の名折れ。こゝぞと想つて火蓋を切つた。座云、「大似春意。」それは御愉快のことでごさる。——或人は云ふ、芳草落花と云ふ春景に片寄つた處を見て斯く云うた、と。或は然らん。——圓悟禪師は首座を冷かして、

相隨來也。芳草落花のお伴僧かな。——諸君は首座に代つて如何に御挨拶をなさる。——趙州禪師ならば無論、喫茶去であります。——長沙は法戰場中の老將軍、少しも油斷はない。首座が芳草落花から侵入して來りし事を洞察して曰く、「也勝秋露滴芙蓉。」と。(芙蓉は蓮の葉のこと。)春の暖かい景色は、秋の冷たい露が枯れた蓮の葉に滴る殺風景とはくらべものにはならぬ。實に陽氣で心持がよい。——どこまでも去來自由、出沒自在、少しも滞る蹤跡を止めない處が長沙の境界。長沙は暗に首座の賊意あるを知りてか否や、は人の忖度を許さず。されど首座は、到底及ぶ處に非ずと知つて退却した。故に圓悟

禪師曰く、當退知退良將、と。首座その人を嘲弄された。衲、首座に忠告して曰く、油斷をすると圓悟禪師に笑はるゝぞ。雪竇著語云、「謝答話。」雪竇禪師が首座に代つて、おありがたうと御禮を申された。圓悟禪師評して曰く、「一火弄泥團漢。」（兵隊の数は五人を伍となし五伍を火となすと云ふから、二十五人の一小隊を一火と謂ふ、と聞く。）亦曰く、「三箇一狀領過。」長沙も首座も雪竇も同じ仲間、三人が三人とも同罪と云うて幕を落された。

以上の一幕の活動を雪竇禪師が評した、それが次の頌。

◎頌

大地絶纖埃、何人眼不開、始随芳草去、又逐落花回、羸鶴翹寒木、狂猿嘯古台、長沙無限意、咄、

讀方

大地纖埃を絶す。何人か眼を開かざる。始は芳草に随つて去り、又落花を逐うて回る。羸鶴寒木に翹ち、狂猿古臺に嘯く。長沙限り無きの意。咄。』

此の頌を井上君が衲が如き無學文盲の者のために分解して示された。曰く、最初の二句は、宇宙に眞、善、美の充滿して居ることを頌じ、『次の二句に於て長沙景岑を叙し、『その次の二句は、天下の人々がこの宇宙の眞、善、美をよそに見て、恰も

羸鶴、狂猿のやうな行動をして居ることを嘲罵し、「最後の一句に長沙に對す雪竇の同情を含めたものである、と理事整然たる井上君の垂示を飲んで謝さざるべからず。

例に依り例の如く疎略な提講を左に試みます。

「大地絶纖埃。」楞嚴經には清淨本然云何忽生山河大地、とあり、維摩經には心淨ければ國土亦淨し、とあります。『纖埃を絶すと云はるゝだけ纖埃があるではないか。靈龜尾を引くを如何せん。——山は山、山と云はずして山。水は水、水と云はずして水。然るに水を水と云ひ山を山と云へば、山と云ふだけ水と云ふだけ纖埃となる。——疎影横斜水清淺、暗光浮動月黃

昏、這箇に纖埃ありや。——千峯勢到岳邊止、萬波聲歸海上、消、恁麼に纖埃ありや、——漁翁睡重春潭澗、白鳥不飛舟自横、之是に纖埃あるなし。

大内君は、十方法界清淨無礙にして佛だの衆生だの迷だの悟だのと云ふ厄介な品物が毫末ばかりも見えぬ有様、それが即ち長沙遊山の境界、それを此の一句に頌じ盡してある、と云うて居らるゝ。お説御尤であります。——されど恁麼の境界は長沙に限らず。「何人眼不開。」何人でも一回此の境界に達せざれば自己胸宇の天下は泰平にならぬ。釋迦何人ぞ。達磨何人ぞ。彼も人なり我も人なり。なすことある者は皆かくの如し。草木

國土も悉皆成佛、——要する處は頂門上に一隻眼を豁開し、大光明を放つて四天下を照破すべし。然らざれば大地纖埃を絶する端的底は知れぬ。一回心眼を豁開し來れば、見るもの悉く眞となり善となり美となる。纖埃と雖も畢竟纖埃の纖埃とすべきなし。「始隨芳草去、又逐落花回。」長沙の答話そのまゝ、雪竇が長沙か、——長沙が雪竇か。——白隱禪師の所謂、無相の相を相として往くも還るもよそならず、無念の念を念として、謠も舞も法の聲。——圓悟禪師は、芳草に隨ふと云ふ處へ、「漏逗不少、」——芳草に隨ひ去ると云ふは少々浮氣の沙汰ではないか、と抑へておき、落花を逐ふと云ふ處へ、「處々全眞、」

落花を逐うて回る、歩々是れ清風、足實地を踏む、と揚げられた。——抑へたり揚げたり、圓悟禪師は圓悟禪師で人の知らない遊山をして御座る。——或人は云ふ、雪竇禪師、特得の大才を以て長沙禪師の遊山に對し自己の遊山底を左の二句に吟出なされた、と。是も一説。——「羸鶴翹寒木、狂猿嘯古台。」井上君は此の兩句に對し嘆息して曰く、「世の中の人々は實に憐れなヤツばかりである。この神の恵みの豊富なる宇宙に居ながら、老ぼれた鶴が枯木の上につまだちしてヒヨコ／＼して居るやうな風をして居たり、また病みつかれた猿が古寺の屋根でぶら／＼うそぶいて居るやうなザマをして居たりして、神の恩恵

を感謝もせず自然の美を讚美もせず無意味な生涯を送つて居るのである。このみじめな世の様を眼前に見て居る長沙の感慨は如何ばかりであらうか。羸鶴狂猿の耳許で大喝一聲して彼等の迷をさましてやりたい。」と、長沙に同情して居らるゝ。』長沙禪師の胸中、果して恁麼いんまでありしや、亦、雪竇禪師、井上君と同意でありしや否や、は別問題として、羸いん(弱、劣)は瘦せ衰へたる鶴が冬枯の樹の枝に凜然たる寒風に吹かれて孤立、狂は老ぼれた猿が寂寥たる日暮に古色蒼然たる古寺の屋根に嘯く。之是を大地纖埃を絶すと云ふ處から見れば、春風駘蕩の遊山と同一味。——始隨芳草云々は長沙の遊山、——羸鶴云々は、

雪竇禪師の遊山、——と見る、敢へて不可なし。要するに羸鶴云々の二句は、思慮分別を離れ、愚の如く魯の如き境界。』盛氣の盡きたる枯木、人跡絶えたる古台、それに立ち、それに嘯く。それを首座に比し、それを哀れと見、氣の毒と思ふは、見る人の哀れ、聞く人の氣の毒。——鶴そのもの猿そのもの、果して人間の忖度するが如きでありしや否や、は鶴に聞かず猿に問はずして彼是と比評することは書生の空論。鶴に笑はれ猿に嘲あざわらけらるゝかも知れぬ。——衲なまは忖度す、雪竇禪師の境界は羸鶴のそれに似て狂猿のその如し、と。——圓悟禪師は羸鶴云々の兩句に向つて、一句を添ふることを得ず、一句を減す

ることを得ず、と雪竇禪師を稱賛して居らるゝ。されど雪竇禪師は、以上の兩句を以て長沙その人の境界は言語筆頭の到底及ぶ處に非ずと云ふ意旨の一端を流露したもものならん。信ぜざれば下句を見よ。「長沙無限意。」とある。筆を以て如何に書き、口を以て如何に語ると雖も、書き盡せず語り盡せず。——それを知りつゝ長沙の境界に引づられて、計らず頭上に頭を、雪上に霜を。何たる愚劣漢ぞ。咄。自己自身に向つて自省すると共に是で一切帳消し。——大内君曰く、芳草だの落花だの羸鶴だの狂猿だの色々なことを並べたのも、只この一咄で悉く一陣の颶風に草も木も吹飛ばしたやうな景況ぞ、と。可謂、好文

字禪と。——圓悟禪師は此の咄に、賊過ぎて後に弓を張る、と云うて、雪竇禪師の手遅れに注意してをらるゝ。——衲が眼から見れば圓悟禪師も賊過後張弓、ではないか。——と云ふ曇華も亦復、賊後の弓と冷笑さるゝならん。咄。釋迦文殊罔明を引つれて、それからそれへ深山木の春。——

(昭和十三年二月十三日講演)

第三十七則

盤山三界無法

◎垂示

垂示云、掣電之機、徒勞佇思、當空霹靂、掩耳難諧、腦門上播紅旗、耳背後輪雙劍、若不是眼辨手親、爭能構得、有般底低頭佇思、意根下卜度、殊不知鬪體前見鬼無數、且道不落意根、不抱得失、忽有箇恁麼舉覺、作麼生祇對、試舉看、

讀方

垂示に云く、掣電の機、徒に佇思を勞し、空に當つて霹靂、

耳を掩ふに諧ひ難し。腦門上に紅旗を播げ、耳背後に雙劍を輪すも、若し是れ眼辨じ、手親しきにあらざれば、争でか能く構得せん。』有般底の低頭佇思、意根下の卜度なれば、殊に知らず、鬪體前に鬼を見ること無數なるを。且く道へ、意根に落ちず、得失を抱かずして、忽ち箇の恁麼舉覺有らば、作麼生か祇對せん。試みに舉す看よ。』
圓悟禪師が本則の盤山禪師を目標としての垂示。誤つて定盤の星を認むる勿れ。

「掣電之機、當空霹靂、」此の二句、異文同意。——正師家、盤山禪師が學人を接する活手段。——敏捷にして且つ峻峻、

佛祖と雖も窺ひがたし。天地も粉碎する底の百雷一時に落つ。

かゝる掣電、霹靂の時、學人たる者聊かでも、徒勞佇思、思慮分別に亘り、彼れか此れかと首鼠兩端したたら、正師家の霹靂たる掣電に打たれ、掩耳難諧、即死の外なしである。

「腦門上播紅旗、耳背後輪雙劍」是も正師家が學人を接する慈悲の方便。(降參の時は白旗、大勝利の時は赤旗又は紅旗)正師家がまだ戰端を開かざる以前に於て大勝利の紅旗を腦門上、自己の頭上に高くかゝげ、耳背後に二振りの名劍を風車の如くまわしつゝ、學人を目がけて眞一文字に突進なさる其の勢ひ、猛虎のそれの如く、怒れる獅子のそれに似たり。——此の時に當

つては臨濟の喝雷、徳山の棒雨も用ふることを得ず。況んや普通一般の學人に於てをや。如何ともなす能はず、所謂氣を呑み聲を飲んで倒退三千するより外なし。——現今の正師家たる人、恁麼の活手段ありや。恁麼の活方便ありや。何れも老婆、然らざれば野狐の部類。——好弟子、良學人の出でざる、宜なるかな。——「若不是眼辨手親、爭能構得。」かゝる越格、超凡の正師家に逢著した其の際、其の時、間に髪を入れず、龍蛇を定むる眼を開き、虎兒を擒ふる機を振り、咄嗟に斬込む腕がなければ、到底相手にはなれぬ。——然るに「有般底低頭佇思、意根下卜度、」有般は那般、這般と同意、一般の人を云ふ。

意根下は思慮分別。

大概の學人は正師家に一言半

句を示さるゝと、腕を組み頭を傾け、七識八識の妄想分別を以て當てつ較べつするが、如何に當てつ較べつしても、玄の玄、妙の妙は、當てつ較べつすればするほど、種々様々の障礙が起り、圓融無礙の境界に轉々遠くなるのみ。——そのありさまを、「殊不知、髑髏前見、鬼無數。」自己自身の妄想袋から、ありもせぬ幻影を無量無數に書き出し、而して驚いたり怒つたり、泣いたり悲しんだりして居る。——如是神經病者、到る處に多し。——然らば如何にして可ならん。他なし、「不落、意根、不抱得失。」思慮分別に亘らず、得失是非を一切抛外すべし。——

「忽有、箇恁麼舉覺。」盤山禪師、學人の面前に向つて掣電、霹靂、紅旗、雙劍、等を一時に展開なされた。サア——其の時、「作麼生祇對。」祇對は、切りぬける。——如何に挨拶する。如何に應對する。如何に身をかはす。仁に當つて師に譲らず。法戰場中、遠慮は無用、サアく如何にく。試舉看。例に依つて例の如く本則を以て點檢するのである。——

◎本則

舉、盤山垂語曰、三界無法、何處求心、

讀方

舉す。盤山垂語して曰く、「三界には法無し。何れの處にか心

を求めんや。」

盤山ばんざん禪師は南州盤山の寶積ほうじやく禪師、馬祖下の尊宿、後に勅して凝寂大師と賜はる。此の人、悟らざる以前、常に泣面をさげて市中をぶらつき、「何ものが最も苦なる。」と。——或日、肉屋へ肉を買ひに往き、「好い肉を賣つて貰ひたい。」肉屋の主人云く、「悉く是れ好肉。」と。聞いてチラツと眞理の一端を瞥見し、「實にそれに相違ない。天地萬物、一として悪いものはない。然るに好いの悪いのと擇り嫌ひする、それは擇り嫌ひするものゝ罪。」以後本當に修行して、馬祖の衣鉢を受け、三界の大導師となられた。——盤山、遷化せんげに臨み衆に謂ひて云く、「人の

吾が眞を貌得あるありや。」衆各眞を寫して盤山に呈す。師、皆之を叱す。普化ふけ、出て云く、「某甲貌得す。」師云く、「速に老僧に呈似せよ。」普化、便ち筋斗を打して出で去る。師云く、「這漢向後、風狂の如くにして人を接し去るあらん。」と。——嗣法の弟子は普化一人のみ。盤山禪師の豫言の如く、普化は風狂を以て臨濟禪師の化を助け、例の明頭來や明頭打云々を唱へられた。

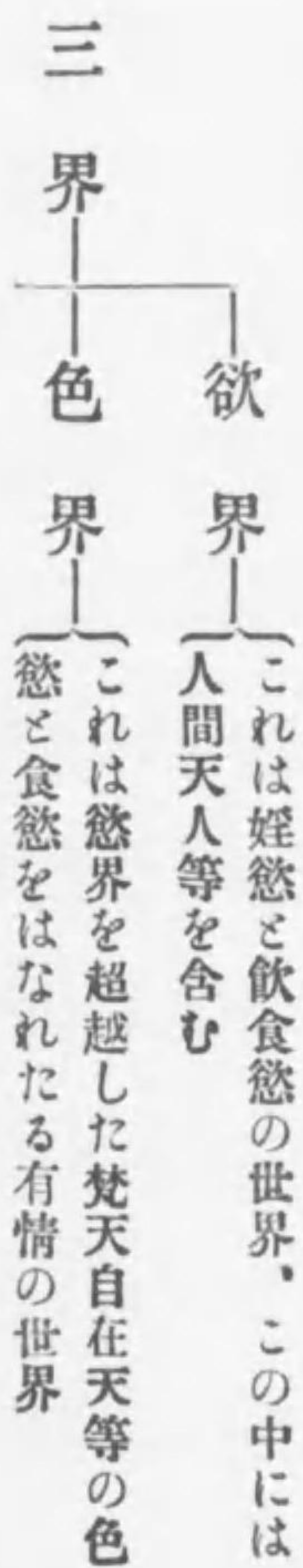
盤山一日示衆云、「三界無法、何處求心、四大本空、佛依何住、瓊璣不動、寂止無痕、觀面相呈、更無餘事。」本則は以上の示衆そのものゝ中の二句。

是が掣電、霹靂の垂語。學人僅に佇思し去らば喪身失命。會せんと要せば直下に會し去れ。三界無法、何處求心。

擬議せば三十棒、思量せば大喝一聲。——サア

ドウダ、サア——サア——。

「三界」界は差別の義と間隔の意、自由を束縛するもの。それが三つある故に三界と云ふ。詳細は俱舍論にありと云ふ。今は其の大綱を表にして示しませう。



「無色界」——これは情慾、物質慾等を離脱したる靈の世界

右は何れも生活状態の内容を三階級に分けたもの。自由を束縛せらるゝ點に至つては三界共通であります。故に眞箇の自由、大自在を得んと欲する者は、生死を脱得し三界を出離せざるべからず。(臨濟禪師は、三界を出離して何の處へ往く、と云うて居らる。此の語、仔細あり。)
「無法」法は名相にして差別の義。又法は物なりとも云ふ。——元來法に自性なし。故に定まりたる名相あるなし。常に變化して止まらず。依つて無法と云ふ。古人の偈に、無法の法も亦法なり、とある。時に隨ひ

處に應じて、無法が法と顯ることもある。』されど物、物に非ず。法、法に非ず。——法、獨り弘まらず。法は必ず人に依つて弘まる。——要するに三界は無法、三界自ら三界と云はず、三界の名相を立て、三界となす者は畢竟何ものぞ。——云ふこと勿れ、心と。——三界既になし、何處求心。——華嚴經に、三界唯心、心外無別法、とある。盤山禪師は三界無法、何處求心、と。

諸君、華嚴經の三界唯一心、心外無別法、と、盤山禪師の三界無法、何處求心、と、是れ同か、——是れ別か。——別と云ふも當らず。同と云ふも當らず。打つ人も打たる、人も諸共

に、如露亦如電、應作如是觀。』——淀川の月はまんまるまん金丹、のぼせにもよし、くだしにもよし。』

心は由來不可得。——金剛經に三世不可得とあり。二祖慧可大師は、心を求むるに不可得、と。——白隱禪師は、分明なり三世不可得、と。されど不可得底必ずしも不可得に非ず、不可得底是れ可得。——眞箇自己なき處に體達すれば、三界は實に吾有。その中の衆生は實に吾子なり。——

此の本則に大内君が文字禪を弄してをる、それを茲に轉寫して諸君の一覽に供しませう。「サテ無限の空間中のありとあらゆる森羅萬象を二つにわけて、心と云ひ法と云ふ。當今の言葉

では精神と物質の二つと云ふ。然るに其の心と法との關係に就いて、昔から心外無法とも萬法唯識とも云うて、心識にばかり片寄つた説を主張するのが佛教者の常である。ソコデや、もすれば、佛心であるとか心印であるとか、頻りに心にばかり附きまわる病がある。盤山は今其の病を根本より療治してやらうと云ふのである。——六祖大師も本來無一物と云はれた通り、此の十法界中に法とか物とか云ふべきものは無い。己に無法無界であるとしたならば、何處に心と云ふべきものがある。常に法があると思ふから、心の外に法がないとか又は法が直に心であるとか色々な妄想を逞しくするのであるが、抑々其の法の法

とすべきものが根本的に認められないとしたならば、それと相對して精神とか心識とか認むべきもの、無いと云ふことは當然ではないか。』と。如何にもであります。——

故實全師曰く、「盤山禪師の垂語は、佛一代藏經中に説き及ばさる底の、向上の那一句。是を奔流度刃、電轉星飛と云ふ。學人は是に向つて擬議すれば遂に是れ摸索不着ならん。若し骨に徹し髓に徹して見得透する底の衲僧面前に於ては、盤山も亦是れ一場の敗缺なるのみ。」是亦如何にもである。——諸君、摸索不着とならんより盤山をして敗缺一番せしめよ。如何せば可ならん。無法の二字に着目すべし。

◎頌

三界無法、何處求心、白雲爲蓋、流泉作琴、一曲兩曲無人會、雨過夜塘秋水深。」

讀方

三界には法無し、何れの處にか心を求めんや。白雲を蓋と爲し、流泉を琴と作す、一曲兩曲、人の會するなし。雨過ぎて夜塘に秋水深し。」

三界無法、何處求心、盤山禪師、かくの如し。

三界無法、何處求心、雪竇禪師、亦かくの如し。

三界無法、何處求心、衲も亦復かくの如し。

三界無法、何處求心、唯之是のみ。——是に對して毛髮た

りとも思慮を動かさば三途地獄。——是に向つて微塵だも分別を起さば萬劫鬼窟裡。——之是の二句、心身脱落の良藥。

——之是の二句、脱落心身の忠言。——云ふ勿れ、口に苦

くして耳に逆らふ、と。——耳に逆らふは是れ忠言の忠言たる所以。口に苦きは良藥の良藥たる所以。良藥を變じて毒となす勿れ。忠言を化して惡言となす勿れ。——

雪竇禪師は、心身脱落、脱落心身底より、三界無法、何處求心、と云ふ二句を美化し善化し眞化し、唱ひ出して曰く、

「白雲爲蓋、」——雲有嶺頭閑不徹、——富士山に腰うち

かけて青空を、笠にかぶれど耳もかくれぬ。』——之、是を無法の法と云ふべき乎。——

「流泉作琴、」——水流岩下太忙生、——墨染を洗へば波も衣きて、水も浮世をいとふものかな。』——之、是を無心の心と云ふべき乎。——無法の法、——無心の心、——それが花ともなり月ともなり、雨とも風とも、亦是山とも川とも宇宙とも三界ともなる。——

「一曲、兩曲、無人會。」——盤山禪師は、三界無法、何處求心、と云ふ那一曲を、西來の無孔笛むくやくてに和して、順風に吹き終つて亦逆風に吹き來る。雪竇せつたう禪師は那箇の一曲を聞いて、覺えず、細

雨、衣に濕うて看れども見えす、閑花、地に落ちて聽けども聲なき底を和して、白雲を蓋となし、流泉を琴となす、と吟じられたが、大聲は俚耳に入らず、人の會するなし。——盤山と云ひ雪竇と云ひ、何れも無舌の人、無耳の人でなければ聽くこと能はず。相識滿天下、知心能幾人。』——

三界無法底は頭々上に顯露、物々上に全眞。然るに是を見て我がものにする人なく、是を聞いて我がものにする人なし。嗚呼。——孔子は或音曲を聞いて三日肉の味を忘ると云ふ。若し盤山の此の秘曲を聞けば、千劫萬劫、豈啻肉の味を忘るゝのみならんや。一切を忘却し去るならん。

サア諸君、試みに聞きたまへ。耳で聞かずに鼻で、否、鼻で聞かずに全身で、全宇宙で、時間空間を一貫して、サアお聞きなさい。「雨過夜塘秋水深。」——平常心是道。春になれば花が咲く。秋になれば月が苦える。飯を喫すれば腹が張る。風が吹けば涼しくなる。既知琴中趣、何勞絃上聲。——諸君、主意が聞きとれたか。——妙處がわかつたか。聞いても聞かんでも、解^げせても解^げせんでも、三界無法だ。——知つても知らんでも、迷つても悟つても、何處求心だ。——衲^{なま}が庭前に、過去の過去際より未來の未來際に至るまで、不變不磨の一松樹あり。常に恒に三界無法、何處求心、と唱へて居る。寒山是に

題して曰く、微風吹幽松、近聽聲愈好、と。——西岩惠和尙は、去々莫彈鳴鶴怨、老僧門外有松風、——寂室禪師は、聽罷松風午睡濃、と。衲は毎日寂室禪師を學んで午睡濃。——

(昭和十三年二月二十六日講演)

第三十八則 風穴祖師心印

◎垂示

垂示云、若論漸、也返常合道、鬧市裏七縱八橫、若論頓、也不留朕迹、千聖亦摸索不着、儻或不立頓漸又作麼生、快人一言、快馬一鞭、正恁麼時、誰是作者、試舉看、

讀方

垂示に云く、若し漸を論ずれば、也常に返して道に合し、鬧市裏に七縱八横ならん。若し頓を論ずれば、也朕迹を留めずして、千聖も亦摸索不着ならん。儻し或は頓漸を立せざれば、

又作麼生。快人には一言、快馬には一鞭。』正恁麼の時、誰か是れ作者なるぞ。試みに舉す看よ。』

此の則に井上君の忠告があります。衲は共鳴少からず。故に拜借して諸君のお耳に達します。

本則の舞臺に登つて居る人物は、風穴、盧陂、牧主の三人であります。元來この公案はよほど芝居氣のある話で、ある意味で俗臭紛々たる所があります。一口で云へば、風穴と云ふ多少山氣のある坊さんが郢州の牧主の招待をうけて、その牧主の公衙内で、所謂禪問答の芝居をやつたので、禪坊主の所爲としてはあまりほめたことではありませんが、當時の禪僧は、今日の

日本の禪僧と同じく、俗官吏から〇〇大師とか〇〇禪師とか云ふ虚號を貰つて、有頂天になつて皆大歡喜して居たのでありますから、風穴が俗官吏の御前に於て演奏をやつたのも、これまた時勢の然らしめた所。あながち彼の死骨に鞭うつわけにはゆきませんが、兎に角彼はよほど俗氣十二分の禪僧であつたに相違ありません。遠い昔の支那でなくても現にこの日本にも、風穴のやうな俗臭紛々たる禪僧はいくらも居ます。』以上井上君の忠言、——

衲等の心肝に徹しました。現に衲の如きは自分自身で俗臭紛々たることを承知して居ります。されど、知りつゝ、眞箇の禪僧になり得ざるは、蓋し信念の不足が然らしむる處と、

過つて下化衆生門に、聖胎長養の未熟を顧みず飛出した其の結果であります。今や老いたり、日暮れて道遠しの感ありと雖も、思ひ立つ日を吉日として根かぎり勢力のつゞく限り忠言に随ひませう。

提講。此の垂示は敢へて説明する迄もなく、一見正師家が學人を接する活作略であること云ふことが明瞭であります。されど、例に依つて聊か婆言を弄すことも、一時の座興と共に多少の参考になる點なきにしもあらず。——一物あれば必ず表裏あり。一事あれば必ず正變がある。その如く佛教にも表裏があり正變があります。従つて禪に於ても表裏、正變あるは理の

當然であります。禪では表裏、正變と云はずして、把住、放行と云ひます。宗旨の立脚地は不立文字、教外別傳。——其の不立文字、教外別傳を體得せしめんが爲に、正師家が常に學人を接する手段。

「若論漸、也返常合道、」是は正師家たる其の人が學人を接する放行。——論漸とある此の漸は教相の頓に對する漸に非ず。』文字や言句等に執着して動きのとれぬそれ等の人を接するに、高上の那一着とか聲前の一句を用ひず、第二義門に下り臨機應變、或時は南に面して北斗を見せしめ、——或人には佛殿に乗つて山門を出でしめ、又は首は天臺を枕に、足は南岳

を踏ましむ。要する處は學人をして一切の知解情識を蕩盡し、以て大道の根源に至らしむる一時の方便。——其の方便一ならざる様子を、「鬧市裏七縱八横、」と云うたのである。云ひ換へれば和泥合水、灰頭土面。——例せば布袋和尚の如く又は一休禪師の如く、五濁惡世の眞つ只中、貪欲瞋恚愚痴隊裏に混入し、東京なら淺草、大阪なら千日前、京都なら京極、彼に同じく此に同じく、——彼水に入らば我も亦水に入り、彼火に入らば我も亦火に入り、共に談じ共に笑ひ、俱に悲しみ俱に喜び、以て學人をして宗旨の堂奥に登らしむるのである。——是に反したる把住は、「也不留朕迹、」（抜く手を見せず、）直指單傳

の正面から、何と云うても未在々々、何と出て來ても不
 是々々。或は棒、或は喝。故に「千聖亦摸
 索不着、」學人に對して點滴も施さず一手も許さぬ、所謂坐斷
 要津。三世諸佛も歷代の諸祖も如何ともなす能はず。況
 んや其の他の者に於てをや。近傍すれば火星飛び面門を燒却
 する。——以上は放行と把住、兩々相對底の閑葛藤。
 「儻或不立頓漸又作麼生。」頓にも漸にも、放行にも把住にも、
 何れにも偏せず、西來の端的、禪の面目を拈出し來れ、提唱し
 見よ、と云はれたら諸君は如何がなさる。

大内君、例の文字禪を弄して左の如く云うてをらる、。「有る

なら有るで好し。無いなら無いで好し。何とでも考は附けやう
 けれども、有るでもなければ無いでもない、然らば有無の中間
 かと云ふに其の間でもない、と云ふことになつては、何とも手
 の着けやうがない。之を禪語で、鐵榘子だの鐵饅頭だの鐵疾藜
 だのといふ。近頃の或禪師は鐵砲玉というた。實に筒を離れて
 飛出した鐵砲玉ほど手のつけやうの無いものはあるまい。」と。
 されど手のつけやうの無き所に向つて易々手を附けるのが禪僧
 の禪僧たる眞價である。作麼生か禪僧の眞價。「快人一言、快馬
 一鞭、」——至理の一言は凡を轉じて聖となし、還丹の一粒は
 鐵を轉じて金となす。多言は無用、多鞭は不可。

没量の人には一言、—— 駿馬には一鞭。—— 誰か是れ没量の
 人。駿馬何の處にありや。—— お互が没量の人となるべし。
 而して駿馬に乗るべし。—— 馱馬に乗る勿れ。—— 不快の
 人となる勿れ。—— その快人は、その駿馬は。—— 「正恁麼
 時、誰是作者。」現今ありや。なければ正法は滅亡。無論ある。
 どこに。鼓を打ち普請して見よ。—— 古人にある。試舉看。」
 出して見せませう。サア高く眼を着けて見たまへ。見たら直下
 に同化してその人となるべし。サア——。

◎本則

舉、風穴在鄧州衙内、上堂云、祖師心印、狀似鐵牛之機、

去即印住、住即印破、只如不去不住、印即是、不印即是、
 時有盧陂長老、出問、某甲有鐵牛之機、請師不搭印、穴云、
 慣釣鯨鯢澄臣浸、却嗟蛙步躡泥沙、陂佇思、穴喝云、長老
 何不進語、陂擬議、穴打一拂子、穴云、還記得話頭麼、試
 舉看、陂擬開口、穴又打一拂子、牧主云、佛法與王法一般、
 穴云、見箇什麼道理、牧主云、當斷不斷、返招其亂、穴便
 下座、

讀方

舉す。風穴、鄧州の衙内にあつて、上堂して云く、「祖師の心
 印は狀鐵牛の機に似たり。去れば即ち印住し、住すれば即ち

印破す。唯去らず住せざるが如きは、印するが即ち是なるか。印せざるが即ち是なるか。」時に盧陂長老あり。出でて問ふ、「某甲に鐵牛の機あり。請ふ師、印を搭せざれ。」穴云く、「鯨鮓を釣り巨浸を澄ましむるに慣うて却て蛙歩の泥沙に躡ぶことを嗟く。」陂、佇思す。穴、喝して云く、「長老何ぞ語を進めざるや。」陂、擬議す。穴、一拂子を打す。穴云く、「還話頭を記得するや。」試みに舉せよ看ん。陂、口を開かんと擬す。穴又一拂子を打す。牧主云く、「佛法と王法とは一般なり。」穴云く、「箇の什麼の道理をか見しや。」牧主云く、「斷すべきに當つて斷ぜざれば返つて其の亂を招くものなり。」穴便ち下

座せり。」

風穴の延沼禪師は臨濟禪師の曾孫、達磨大師より十四代の祖師、時代は唐が亡び宋が未だ興らぬ五代亂離の頃である。郢州と云ふ國の牧主、本名は知れませんが。其の人が延沼禪師を自分の役所へ請待された時のこと。臨濟禪師が河南府主の請待を受けて諸官員の爲に上堂なされた、その如く牧主の役所に於て上堂。

井上君は俗臭紛々たる禪坊主と抑下さるゝが、抑下さるゝほどの俗僧ではありません。昭和の今日、日本の僧界にあれば堂々たる大善知識。何に依つて斯く云ふならば、經に若於園中、

若於林中、若於樹下、若於僧房、若白衣舍、若在殿堂、若山谷曠野、是中皆應、乃至諸佛於此、轉法輪、諸佛於此而歸涅槃、とあります。故に時と處を嫌はず隨緣赴感、以て法を布き人を化するは沙門の本分。その本分をなされた風穴禪師、人は俗臭紛々と呼ぶと雖も御本人は法に對して盡忠報國の使命をなしてをらるゝのである。寧ろ賛賞すべきである。云ふ勿れ、自己の俗臭を覆ふためなりと。或は然らん。

「風穴在郢州衙内、上堂云、」衙内は役場のこと。上堂は禪宗の師家が須彌檀上に於て門下及び信者の一同に垂示をしたり問答商量する時の式。今は宦舎の役場であるから上堂とは云ふも

の、略式。云は、高い臺の上で、と云ふ處でありませう。茲の處へ圓悟禪師が、公に依つて禪を説く、國主の請に依つての說法、私ごとでないぞ、と風穴に注意を與へたは益友の同情。されど衲は圓悟禪師に向つて一言あり。我道は一以て貫く。法の上には公私の差別なし。一とは何か。誠の一字。——「祖師、心印、狀似鐵牛之機、」實を云へば祖師の二字は無用。狀と云ふ字も似たりと云ふ字も共に無用。——單に心印鐵牛之機でよい。されど風穴の云はれしまゝに提講すれば左の如し。祖師とは達磨大師のこと。大師始め支那へ來り、梁の武帝と問答。其の心底は佛の心印を傳へたきが爲であると寶誌和尚は云ふ。

(眞僞は別の問題。)云ふ處の心印とは如何なるものか。

眞如とも佛性とも亦は菩提とも涅槃とも、本來の面目とも主人公とも、名は多種多様であるが、要するに人々、本具、箇々圓成。

然らば其の形、と質問さるゝと即答は出來ぬ。ソ

コで兒をあはれんで醜を忘れ、風穴、老婆の臭口を開いて、心印狀似鐵牛之機、と混沌の爲に眉を畫いた。鐵牛と云ふは、

聞く陝州と云ふ處で、黄河の守護神として鐵牛を造る。其の鐵牛、黄河を跨いで頭は河南にあり尾は河北に、と云ふから非常に壯大なるものである。故に如何なる大水が出ても流れる心配はない。(今は有りや無しや。)元來鐵で造つたもので生きては

をらぬ。それが州民の祭りを享け能く河を護る處を見れば死物とは云へぬ。お互所持の心印も方に斯の如し。玄沙は盡

大地沙門の一隻眼と云ふ。鐵牛の機と云ふも一隻眼と云ふも異名同體。——圓悟禪師一語を下して曰く、千人萬人撼せども

動かす、と。無論然り。他動を以て如何ともなす能はず、動不動は、其の人其の人の意旨如何にある。——飯田師が鐵牛の

字に因み、一寸面白い話を挿畫にしておかれたから、諸君に福わけを致します。

黄檗宗の鐵牛と云ふ傑僧が、伊達綱村侯の建立した仙臺の大年寺で上堂の時、僧が、蚊子鐵牛を咬む時如何、と問うた。

鐵牛藏身の状をなす。僧更に、吞却し了る、と云ふや否や、何とじてか、這箇の一棒を餘し得たる、と云うて熱棒を喫せしめた。その僧、忽ち棒下に絶息、その場で、紅葉落時山寂々、蘆花深處月團々、提起向上那一刀、虚空碎作七八片、』と引導を渡したとある。

心印の印は何人も仕用して居る印判に譬へたのである。印判は文書等に相違なき證據として押すもの、今は吾人の心と佛祖の心と更に差異なき證據に用ひる。

「去即印住、」紙に印形を押したまゝでなく印形を去れば印紋が明瞭に現出す。放行すれば瓦礫光を生ず。唯他の境界、

—— 自己忘却、—— する時一切自己。——

「住即印破、」紙に印形を押したまゝにして印形を取らざれば、印紋は出現せぬ。把住すれば眞金色を失す。唯自の境界、否、自己を求むるに不可得。要するに把住を外にして放行なし。放行を除いて把住なし。把住即放行、放行即把住。活人劍の外に殺人刀なく、殺人刀を除いて活人劍なし。活人即殺人、殺人即活人。印形即印紋、印紋即印形。把放同時、殺活同時、印紋不二。上求菩提にも下化衆生にも暫くも離るべからざるものは之是なり。

「印即是、不印即是、」是非、善惡、得失、一切の差別を超越

し、所謂天下大平に到れば、印も不印も印住も印破も總て無用。
 無用と知りつゝ、恚^い麼^いに云はるゝは學人を釣^いり出す手段の
 索語である。

「時、有^い盧^い陂^い長^い老^い、出^い問^い、某甲、有^い鐵^い牛^い之^い機^い、」果然釣針に上り來
 る。是非を説く人は是非の人なり、で鐵牛と自己と二一つに見た。

敢へて盧陂長老に限らず、一切衆生誰か鐵牛の機を所持
 せざるものあらんや。但憐む、鐵牛の機を如何に活用すべきか
 を知らざるのみ。——佛教に三法印あり。泥に印し、水に印
 し、空に印す。——空に印する道力がなければ、鐵牛の機あ
 りと雖も所謂寶の持ち腐り。寧ろ匹夫、玉を抱へて罪ありだ。

長老の如きは蓋し匹夫のお仲間ならん。斯く云ふ衲も其の仲間
 に漏れず。諸君は如何が。

「請^い師^い不^い搭^い印^い、」印のことが氣にかゝると見える。——問に
 落ちずして語るに落つると云ふ類。口を開かねばこそ五臟は見
 へぬ。——知らざるを知らずとせよ。——然るに知らざる
 を知つた顔する、愚は益^い愚^い。——拙僧の鐵牛の機は印住だ
 の印破だのと云ふ疵をつけてくださるな。——世間に斯の如
 き人僅少ならず。此の身此の儘、生佛、生如來。——更に修
 養だの參究だの必用なし。困じては眠り飢ゑては喫す、何の必
 用あつてか、と、——似たりや似たり。されど是なることは

是ならず。

「穴云、慣釣鯨鯢澄巨浸、却嗟蛙步驟泥沙。」吞舟の大鯨を釣つて大海を澄さんと思ひしに、志したる其の事ならず。思はざりき、蛙も蛙、泥まぶれの小蛙が喰つて來た。斯く罵倒されたら、氣慨あるものは蓋しそのまゝにはしておくまいに。』盧陂長老、快馬に非ずして馱馬。快人の一言を聞き大悟すべきに、却つて「陂佇思」とは残念々々。先に云ふ某甲鐵牛の機ありと。其の鐵牛の機をドウした。世間恁麼の人、麻の如く粟に似たり。陂長老の知己知音、古往今來、決して少からず。斯く云ふ衲も昔は君の同伴でありし。

「穴喝云、長老何不進語、」義を見てなさざるは勇者に非ず。今だ今だ。サア云へ。サア云へ。衲なども恁麼の場合に出逢つたことがある。サア——サア——と云はるれば云はるゝほど、言語が咽につかへて出て來ぬ。出るものは汗のみ。

「陂擬議、」云はんとして云ひ得ざる貌。風穴禪師は公衆面前であるから氣が氣でない。されど陂長老は如何せん、忘前失後せしを。——「穴打一拂子、」此處へ圓悟禪師が下言として曰く、

「好打。」まことに好い打ちやうだ、と。——果して好打であらうか。穴禪師、或は止むことを得ずであつたかも知れぬ。

飯田師曰く、此の一打、權あり實あり、或時は金剛王寶劍と

なりて總てを截斷し、或時は探竿影草となりて龍蛇を分つ、果して今は蛇であつた、と。蛇と見て頂いたは陂長老の幸運。衲は蛇とは見ない。何と見る、盧陂長老と見る。

「穴云、還記得話頭麼、試舉看、」風穴禪師の老婆、茲に到つて愈老婆。さうは云ふもの、正師家には正師家の手段

がある。現状を見ずして彼れ此れと評を下すは早計。某

甲鐵牛の機ありと云ひし其の鐵牛の機をどうした。試みに舉せ見よ、と云ひながら一掌を與へた。

「陂擬開口、」まだ迷つて居るか。妄想の多いヤツだ。

死ね死ね大死一番すべし。大死一番、再活現前せざれば口

は開けぬ。大死せずして口を開かんと擬するは無理だ。

「穴又打一拂子、」是はとゞめだ。引導最後の一喝。所

謂人事を盡した。是れまで老婆の手を下してそれで氣がつかなければ縁なき衆生、到底濟度の見込はない。地獄へなり極樂へなり又は天國へなり、勝手の處へ行くがよい。言ふ勿れ

落花有意隨流水、流水無情送落花、と。

「牧主曰、佛法與王法一般、」牧主、平素風穴の提撕を受けて居る立場から、恁麼の問答を對岸の火災と同様に看過する能はず。斷然立つて仲裁の勞をとられた。可謂、牧主一隻眼を具す

と。佛法と王法、其の名異なりと雖も其の道は一なり。豈嘗に佛法と王法のみならんや。萬事萬法、悉く然らざるなし。

「穴云、見箇什麼道理、」如何なる道理あつて横合から口を出さるゝ。法令親なし。次第に依つては貴殿と雖も容赦はせぬ。

風穴が向上の鉗鎚を拈起して正法眼藏を扶豎する處。

「牧主云、當利不斷返招其亂、」(此の語は黄石公の語であると聞く。)時に依り場にも依る。何事も一律一體にはゆかぬが、されど法戦一場の時は又格別。毫釐の差、天地懸隔、生死と迷悟、煩惱と菩提、一言一句、一居一動の上に於て顯然たり明白たり。故に姑息は禁物、——容赦は不是。——斷ずべきは

徹底斷じ、除くべきは徹底除かざれば、其の害、其の毒、盡未來際に及ぶ。——是は牧主が風穴禪師に向つての引導にして

最後の弔慰文。——圓悟曰く、「似たることは則ち似たり。是

なることは則ち是ならず。」と。如何にも是ならず。故に衲は云ふ、「向上の鉗鎚を明らめんと要せば須く是れ作家の爐鞴なるべし。」と。更に參ぜよ三十年。

「穴便下座、」穴の喜び、云はん方なし。唯長老を度し得ざりしを遺憾とせしならん。飯田師は風穴の胸字を忖度せり。機を見て變じ、時に臨んで化す。茲で下座せざれば下座する時なし。仲裁は時の氏神、一切無條件で任すべし。——衙内の法戦一

切終了。

七〇

◎頌

擒得盧陂跨鐵牛、三玄戈甲未輕酬、楚王城畔朝宗水、喝下曾令却倒流、』

讀方

盧陂を擒得して鐵牛に跨り、三玄の戈甲未だ輕酬せず。楚王城畔朝宗の水、喝下曾て却つて倒流せしむ。』

始の一句は風穴の爲人徹惛底を頌じたものなり。——上堂の時、多くの僧がをつた。其の中から盧陂一人が進み出た。それを幸に、眞箇の鐵牛たらしめんと風穴が骨を折つて接得なき

れた。それが鐵牛に跨がらしむである。——親思ふ子よりも親は子を思ふ、ときはの鳥の鳴くにつけても。』子は親の心を知らず、弟子は師の心を知らず。——若し子が親の心を知り、弟子が師の心を知らば、成功も早いし、結果も速である。次の句、「三玄、戈甲未輕酬、」三玄は臨濟の三玄、體中玄、句中玄、玄中玄。』——戈甲は身を固め敵に當る戰爭の武器。三玄、戈甲、其の名異なりと雖も其の體は同一。禪家で法戰場中に於て正師家が使用する處の武器。恁麼の武器を以て冰凌上に行き劍刃上に走りつゝ、常途に反して常途に歸せしむ。それが鬧市裏の七縱八横ではあるが、兎を見て鷹を放つて、兎がをらなければ鷹

七一

を放つ必用はない。是ぞと思ふ學人がなければ三玄戈甲は輕々に使用はしない。盧陂長老の如き弱卒に向つて三玄、戈甲を酬いるは鶏を割るに牛刀を用ひるも同様。蓋し使用法を知らざる者なり。故に風穴は未だ輕酬せず。——弟子を見ること師に如かず。轉句の「楚王城畔朝宗水、」楚王城は、郢州牧主の衙が其の舊跡である故に楚王城と云ふ。——朝宗は諸侯が天子の闕下に參朝すること、今は朝宗の下に水と云ふ字があるから總ての川の水が海に入ると云ふ意味。古人の句に、水流元入海、——四河入海同一鹹味、——萬派聲歸海上消、——水は何れも低い方へ低い方へと流れて海に流れ入る。此の流れ流

れて海に入る水を逆流さすると云ふことは、華山の千萬重を分破する巨靈神でも或はなし得ず。然るにそれを風穴が逆流せしめたと云ふ意で、喝下曾令却倒流、と雪竇禪師は結ばれた。是は風穴の宗風其の孤危峻峭を稱揚したものである。——苟も宗風を護持せんと欲する者は少くとも敵一倍の力がなくてはならぬ。獅子不喰鵬殘、快鳥不打死兔。——換北斗作南辰、轉金鳥爲玉兔。——風穴禪師の如きは可謂、驚走陝府鐵牛、嚇殺嘉州大象、と。——雪竇禪師は、鐵牛が大河の水を防ぐ、それに連想して、風穴の鐵牛、妄想分別、愛河の濁流を防ぐに止まらず更に進んでそれを逆流。——逆流畢竟如何。煩

388
27

惱、を、し、て、菩、提、に。
何、の、功、徳、か、あ、る。
生、死、を、し、て、涅、槃、に。
止、め、よ、止、め、よ。
咄。老、婆、禪、

七四

(昭和十三年三月十二日講演)

昭和十四年一月三十一日印刷
昭和十四年二月六日發行

發行者兼 印刷者 佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

發行所 東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終

